

こうかい よ ひやつこく おう ゆえん もの そ よ くだ もつ
江海の能く百谷の王たる所以の者は、其の善くこれに下るを以て、
ゆえ よ ひやつこく おう ここ もつ たみ かみ ほつ かなら
故に能く百谷の王たり。是を以て民に上たらんと欲すれば、必ず
げん もつ くだ たみ さき ほつ かなら み もつ
言を以てこれに下り、民に先んぜん欲すれば、必ず身を以てこ
おく ここ もつ せいじん かみ お しか たみ おも まえ
れに後る。是を以て聖人は、上に処るも而も民は重しとせず、前に
お しか たみ がい ここ もつ てんか お たの いと
処るも而も民は害とせず。是を以て天下は推すことを楽しんで厭
わす。その争わざるを以て、故に天下に能く之と争う莫し。
あらそ もつ ゆえ てんか よ これ あらそ な

【大体の意味内容】大河や海は、数百以上の谷川が注ぎ込むことで豊かに湛えられたもの

で、いわば「百谷の王」ともいうべき存在である。それは、いかなる流れよりも最も低
くへりくだっているからこそ、すべてを呑み込む「百谷の王」たりうるのである。もしも
人民の上に立つ統治者となりたければ、必ず自分の言動を慎んで万人に対してへりくだ
るべきだ。人々の先導者となりたければ、必ず自分の振る舞いを慎ましくして、万人の殿
を務めようとするのだ。こうすることで、聖人たるものは、人民の上に君臨してはいて
も、人々はそれを重荷とは思わないでいられる。リーダーとして先頭に立っていても、人々
は彼を邪魔な障碍物とは感じない。こうなると天下万民、すすんで彼を君主として推戴し、
その薫陶を受けることを楽しんで嫌がらないのだ。さらに聖人は、人と争うこともしない
から、世界中の人々も彼と争う理由がなくなってしまうのである。

「自分は総理大臣だから森羅万象を担当しているのでありまして…」などどむなしい大言壮語をな
さるでござるの御仁とは全く対極にある話です。いったい、今の世界においてリーダーの立場にある
人々のどれ程が、この「百谷の王」者としての覚悟を以てその任を務めているでしょうか。
そう言える立派な人々もいます。が一国のリーダーである人々に、そのような存在が見当たらない

ような気がします。

この『老子』で「百谷の王たる所以の者」と書いてあるように、「者」のつく存在に着目してみましよう。

医者、学者、役者、教育者、芸者、武者、求道者、忍者、先導者、統治者…

かつて恩師から以下のように教わりました。

「者」のつく彼らはいずれも特殊な職能や霊格を備えた、異郷・異界的な存在とみなされる。彼らは特別な地位や役割を担う代わりに、この世的な常識にフォローされたり安住したりしてはいけない存在でもある。

「医者」は、今日の前に、自分の愛する家族と、自分と敵対する者たちが瀕死の重傷を負って横たわっていた場合、どちらを優先的に救わなければならないか？
当然、敵のほうだ。

「医者」である限りにおいて、自然な人情や常識に従ってしまっただけなのではないのだ。

ほかの「者」もすべて同じだ。「者」になった以上、自分は「非常識な」人非人、制外者として生きる覚悟を決めなければならない。それができないなら、「教育者」になど、なるな！

「教育者」である恩師から、同じく「教育者」になろうとしていた私たちは厳しく命じられました。今でも、そんな覚悟を自分は本当にできているか、備わっているか、自問自答し続けています。

ただ少なくとも、師の言葉がずっと呪縛となり杭となって、心にグサッと刺さっています。

「大臣」とは「大」いなる「臣」と書きます。
つまり「大きな臣（おみ・けらい）」ということとで、それこそ老子の言う「百谷の王」である海のような、すべてのものの下位にあって総てを呑み込める、器の大きな臣僕でなければならないはずです。それでこそ「総理大臣」であるはずです。

